高松市埋蔵文化財調査報告　第194集

店舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

日暮・松林遺跡

（第１１次調査）

２０１８年３月

株式会社大屋
高松市教育委員会

例　　言

１．本報告書は、店舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり、高松市多肥下町に所在する日暮・松林遺跡第 11 次調査の報告を収録した。

２．発掘調査地及び調査期間、調査面積は下記のとおりである。
調 査 地：高松市多肥下町字二反地 474 番 3、474 番 4、475 番 4、476 番
調査期間：平成 29 年 6 月 19 日～ 7 月 7 日
調査面積：約 180 ㎡

３．発掘調査及び整理作業は、高松市創造都市推進局文化・観光・スポーツ部文化財課文化財専門員梶原慎司及び同課非常勤嘱託職員 三輪望が担当した。

４．本報告書の執筆及び編集は梶原が担当した。

５．本調査に関する以下の業務を委託した。
自然科学分析：(株) 吉田生物研究所
遺物写真撮影：西大寺フォト

６．本報告書の作成にあたり、下記の関係者の協力を得た。記して謝意を表したい。(順不同・敬称略)
乗松真也、山下平重

７．本報告書の高度値は海抜高を表し、方位は座標北を表す。

８．遺構断面の注記の色調及び土器観察表の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖 36 版』を参照した。

９．本報告書の挿図として、高松市都市計画図 2 万 5 千分の 1「太田」「多肥・仏生山」・「上林町」及び国土地理院地形図 2 万 5 千分の 1「高松市南部」を一部改変して使用した。

１０．発掘調査で得られた全ての資料は、高松市教育委員会で保管している。

目　次

第Ⅰ章　調査の経緯と経過
　第１節　調査の経緯・・・・・・・・・・・・1
　第２節　調査の経過・・・・・・・・・・・・1
第Ⅱ章　地理的・歴史的環境
　第１節　地理的環境・・・・・・・・・・・・2
　第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・2
第Ⅲ章　調査の成果
　第１節　調査方法・・・・・・・・・・・・6
　第２節　基本層序・・・・・・・・・・・・6
　第３節　遺構・遺物・・・・・・・・・・・・7
第Ⅳ章　自然科学分析・・・・・・・・・・14
第Ⅴ章　まとめ・・・・・・・・・・・・18

挿図表目次

第１図　調査位置図（S=1/2,500）・・・・・・1
第２図　高松平野と遺跡の位置・・・・・・2
第３図　周辺の主要遺跡分布図・・・・・・3
第４図　遺構配置図（S=1/150）・・・・・・5
第５図　トレンチ配置図・・・・・・・・・・6
第６図　調査区土層図（S=1/40）・・・・・・6
第７図　SD01, 02, SK01 平面図・SD01 断面図
　（S=1/80・40）・・・・・・・・・・・8
第８図　SD01 遺物出土状況図（S=1/60）・・9
第９図　SD01 出土遺物（土器）（S=1/4）・・10
第１０図　SD01 出土遺物（木器）（S=1/8）・11
第１１図　SD02・SK01 断面図（S=1/40）・・12
第１２図　SD03・SK02 平・断面図
　（S=1/80・1/40）・・・・・・・・・13
第１３図　周辺調査区位置図（S=1/1000）・19
第１表　土器観察表・・・・・・・・・・・20
第２表　木器観察表・・・・・・・・・・・21

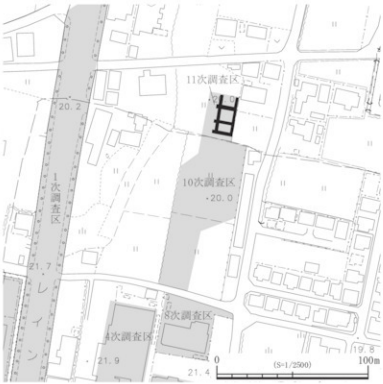
写真図版目次

図版１　SD01 断面
図版２　SD01 第７図 10・12 層
　SD01 第７図４・11 層
　SD01（２トレンチ）北壁
図版３　SD01（２トレンチ）完掘状況
　SD01（２トレンチ）検出状況
　SD01（３トレンチ）完掘状況
　SD01（２トレンチ）壺底部出土状況
　木器（Ｗ１）出土状況
　木器（Ｗ２・５・６）出土状況
　木器（Ｗ３）出土状況
　木器（Ｗ４）出土状況
図版４　調査前風景
　１トレンチ完掘状況
　２トレンチ完掘状況
　３トレンチ完掘状況
　SD02 完掘状況
　SD02 断面
　SD03・SK02 完掘状況
　SD03 断面
図版５　遺物写真（土器）
　遺物写真（土器）
　遺物写真（木器）
図版６　遺物写真（Ｗ１）加工痕
　遺物写真（２１）
　遺物写真（２３）

第Ⅰ章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯

当該地での店舗建設工事計画に際し、事業者から高松市教育委員会（以下、市教委）に対し埋蔵文化財包蔵地の照会があった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「日暮･松林遺跡」に隣接することから、平成 27 年 4 月 13 日付けで埋蔵文化財の試掘調査依頼が提出された。同年 4 月 20 日～ 21 日の実働 2 日間で試掘調査を実施した結果、当該地の一部で遺構・遺物を確認したことから、埋蔵文化財が確認された範囲について周知の埋蔵文化財包蔵地「日暮・松林遺跡」の範囲に追加登録された。



第１図　調査区位置図（S=1/2,500）

その後、事業者による計画の見直しにより、工事範囲が 10 次調査区周辺のみに縮小され、現地保存されることとなった。しかし、新たに店舗建設工事を計画した株式会社大屋から平成 29 年 5 月 1 日付けで文化財保護法第 93 条第 1 項に基づく発掘届出が提出され、市教委から香川県教育委員会へ進達したところ、5 月 11 日付けで工事着手前に発掘調査を実施するよう行政指導があった。これを受けて市教委は株式会社大屋と協議を行い、発掘調査を実施し記録保存を行うことで合意し、平成 29 年 6 月 7 日付けで埋蔵文化財調査協定書を締結した。これに基づき市教委は発掘調査を実施した。

第２節　調査の経過

発掘調査は平成 29 年 6 月 19 日から開始し、7 月 7 日に終了した。主な工程は以下の通りである。

6 月 19 日	東西方向のトレンチを重機掘削、遺構検出、遺構掘削
6 月 20 日	SD01、SD03、SK02 を掘削、1 トレンチの調査終了
6 月 22 日～ 27 日	SD01 を掘削
6 月 29 日	南北方向のトレンチを重機掘削、検出、遺構掘削
6 月 30 日	4 トレンチの調査終了、SD01、SD02 を掘削
7 月 1 日～ 7 日	SD01 を掘削
7 月 7 日	完掘状況の写真撮影、調査終了

整理作業は 7 月 21 日から開始し、平成 30 年 3 月 20 日に終了した。

第Ⅱ章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

高松市は香川県の中央やや東寄りに位置し、市域の大部分は讃岐平野の一部を形成する高松平野が広がっている。高松平野は、讃岐山脈より流れ出た諸河川が運んだ土砂によって形成された沖積平野である。現在高松平野には、東から新川、春日川、詰田川、御坊川、石清尾山山塊を挟み香東川、本津川が北流しているが、中でも香東川が平野の形成に最も大きな影響を及ぼしている。現在の香東川は近世初頃に生駒家の家臣西嶋八兵衛によって改修されたものであり、かつては石清尾山塊の南麓から平野中央部を東北流する主流路が存在していた。この旧流路は、現在では水田地帯及び市街地の地下に埋没してしまっているが、空中写真等から、林から木太地区にかけての分ヶ池、下池、長池、大池、旧ガラ池を結ぶ流路等数本の旧河道が知られており、発掘調査でもその痕跡が確認されている。なお、17 世紀の廃川直前の流路は、御坊川として今でもその名残りを留めている。

第２図　高松平野と遺跡の位置

高松平野を流れる諸河川は、南の讃岐山脈から平野への流入口で穏やかな傾斜を持つ扇状地形の沖積平野を形成し、農耕に適した地味豊かな土壌をもたらしたが、諸河川の中流域は伏流し、表層は涸れ川になることが多く、早くからため池を築造して水不足を解消してきた。これらのため池は、年間 1,000 ミリ前後と降水量の乏しい讃岐平野において農業用水確保のために不可欠なものである。また、今回の調査地である多肥地区周辺は、ため池に加えて出水（ですい）と呼ばれる自噴地下水脈の利用が盛んで、両者を併用した特徴的な配水網と厳格な水利慣行を伝えてきた。調査地周辺では、栗本出水、平井出水、鈴木出水等がみられる。しかし、昭和 50 年の香川用水の通水によって、一帯は三谷町の三郎池の受益範囲に取り込まれ、農業用水の確保の不安が払拭された反面、地元水源を核とした水利慣行が急速に消滅するとともに、ため池や出水の水源自体もその役割を失いつつある。

第２節　歴史的環境

高松平野では大規模開発事業の事前調査により、遺跡数が飛躍的に増加した。特に、今回の調査地周辺域においては、香川県立高松桜井高等学校や都市計画道路の建設等に伴う発掘調査が行われ、面的に遺跡の広がりや内容が判明している地域である。ここでは、本遺跡周辺の多肥松林遺跡群（多肥松林遺跡、日暮・松林遺跡、松林遺跡、多肥宮尻遺跡）の動態について述べる。なお、周辺の調査履歴に関しては、渡邊 2007、松本 2016 に詳しく記載されている。

旧石器・縄文時代の遺構は多肥松林遺跡群ではみられない。松林遺跡や多肥松林遺跡の旧河道からわずかに縄文時代晩期の遺物が出土している程度である。

①：日暮・松林遺跡第１１次調査区　１：日暮・松林遺跡　２：多肥松林遺跡　３：松林遺跡　４：多肥宮尻遺跡　５：多肥平塚遺跡　６：多肥北原遺跡　７：多肥北原西遺跡　８：北原遺跡　９：多肥廃寺　１０：お茶荒神　１１：出口遺跡　１２：空港跡地遺跡　１３：拝師廃寺　１４：上林本村遺跡　１５：畑遺跡　１６：弘福寺領讃岐国田図調査地　１７：宮西・一角遺跡　１８：池の内遺跡Ⅰ　１９：池の内遺跡Ⅱ　２０：岡原遺跡　２１：多肥下町下所遺跡　２２：浪仏遺跡　２３：野郷遺跡　２４：高木城跡　２５：井出上・中所遺跡　２６：西久保遺跡

第３図　周辺の主要遺跡分布図

弥生時代に入ると、前期後半から遺構がみられるようになる。前期後半には松林遺跡で集石遺構、多肥松林遺跡・多肥宮尻遺跡で溝が検出されており、近くに居住域が想定される。中期中葉になると香川県立高松桜井高等学校の中心部を北流する自然河道（多肥松林遺跡１次 SR02、2 次 SR01）が埋没・平準化する。この流路から土器とともに木製農具等が多数出土している。流路の両岸には安定した微高地が広がっており、そこでは掘立柱建物や竪穴住居跡が検出されており居住域が確認されている。また、この時期には多肥松林遺跡の北西部において洪水砂層、松林遺跡において地震の液状化現象を原因とする墳礫が認められ自然災害が起こったことを物語っている。中期後半～後期前半にかけては遺構はほとんどみられず、旧河道や流路からわずかに遺物が出土している程度であり、中期中葉からの集落は継続しない。後期後半から後期末にかけては、日暮・松林遺跡や多肥松林遺跡で竪穴住居跡が多数検出されており再び居住域となる。また、灌漑水路も多数掘削されており調査地周辺域におけ

る大規模な開発が窺える。

古墳時代から奈良時代にかけては、当該期と考えられる遺構が散見され、旧河道や流路から若干遺物が出土していることから近隣に集落があった可能性が考えられる。

平安時代前半（9 世紀から 10 世紀）には、多肥松林遺跡群では主水源の減少に伴って大規模かつ継続的な潅漑水路の整備が行われた。潅漑水路や主水源となる流路から斎串や刀形・舟形等の木製模造品、墨書土器が出土しており、これらがセットで水路の維持に伴う祭祀に使用された可能性が高い。多肥松林遺跡群ではこのような祭祀が複数箇所で行われており、隣接する掘立柱建物群がそれを執り行った可能性も想定できる。また、各掘立柱建物群は大型建物を含むものの規則的な建物配置は認められず官衙施設と考えることはできないが、多肥松林遺跡群からは帯金具や硯、緑釉陶器といった官衙的色彩が強い遺物も出土している。

中世前半（12 世紀後半から 13 世紀中葉）には、掘立柱建物が検出され小規模な居住域が認められる。また、多肥松林遺跡 2 次調査や日暮・松林遺跡 1 次調査で多量の和泉型瓦器が廃棄された溝が検出され、当該地が海浜部の物資集積地と南海道を連結させるアクセス道に隣接した中継地であると評価されている（松本 2016）。

中世後半から近世にかけては遺物や遺構が検出されているが土坑等であり、居住域は形成されていない。

参照文献

香川県教育委員会編 1999『多肥松林遺跡』香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター

香川県教育委員会編 2016『多肥松林遺跡』香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター

高松市教育委員会編 1996『松林遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第 31 集

高松市教育委員会編 2003『日暮・松林遺跡（済生会）』高松市埋蔵文化財調査報告第 66 集

高松市教育委員会編 2004『松林遺跡（第 2 次調査）』高松市埋蔵文化財調査報告第 77 集

高松市教育委員会編 2004『多肥宮尻遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第 78 集

高松市教育委員会編 2005『高松市内遺跡発掘調査概報』高松市埋蔵文化財調査報告第 84 集

高松市教育委員会編 2005『日暮・松林遺跡（済生会特養ホーム）』高松市埋蔵文化財調査報告第 86 集

高松市教育委員会編 2005『日暮・松林遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第 87 集

高松市教育委員会編 2006『多肥宮尻遺跡（衣料品販売店舗）』高松市埋蔵文化財調査報告第 90 集

高松市教育委員会編 2006『多肥松林遺跡（電器店）』高松市埋蔵文化財調査報告第 91 集

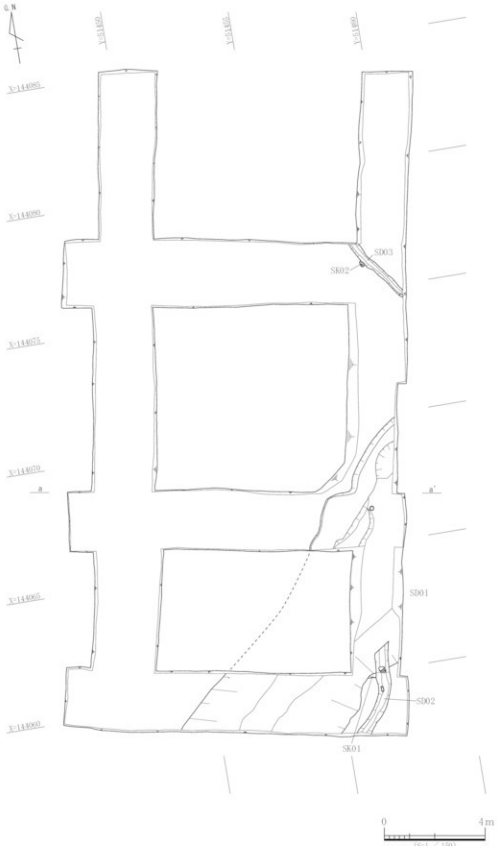
高松市教育委員会編 2007『高松市内遺跡発掘調査概報』高松市埋蔵文化財調査報告第 101 集

高松市教育委員会編 2007『日暮・松林遺跡（共同住宅）』高松市埋蔵文化財調査報告第 105 集

高松市教育委員会編 2016『日暮・松林遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第 173 集

渡邊誠 2007「歴史的環境」『日暮・松林遺跡（共同住宅）』高松市埋蔵文化財調査報告第 105 集

松本和彦 2016「歴史的環境」「総括」『多肥松林遺跡』香川県教育委員会



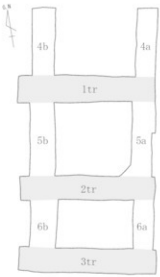
第４図　遺構配置図（S=1/150）

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　調査方法

調査範囲は基礎及び地中梁を敷設する範囲を対象とした。そのため布掘りで掘削を行った。調査区は１～６トレンチを設定し（第５図）、６月19日に１～３トレンチ、６月29日に４～６トレンチを掘削した。発掘調査は表土から遺構面までを重機により掘削、その後人力により遺構面を精査し遺構掘削を行った。

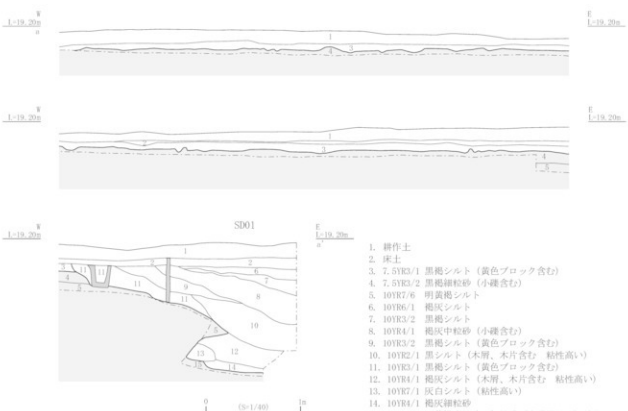
記録に際しては基準点を基に1/20縮尺で平面図及び断面図を作図した。写真撮影は35mmフィルムカメラを用い、モノクロ・カラーリバーサルフィルムで記録し、補助的にデジタルカメラも用いた。



第５図　トレンチ配置図

第２節　基本層序

基本層序は、大きく３つに分かれる。Ⅰ層は、耕作土・床土で、約20cm程度堆積している（第６図1,2）。Ⅱ層は黄色ブロックを含んだ黒褐色シルト層で、約8cm程度堆積している（第６図3）。SD01、SD02はⅡ層上面から掘り込まれており、Ⅱ層が弥生時代後期後半以前に形成されていたことが判明した。Ⅲ層は地山で、黒褐色細粒砂層である（第６図4）。黒褐色



第６図　調査区土層図（S=1/40）

細粒砂層は約15cm程度堆積しており、その下層は明黄褐色シルトである（第6図5）。SD03はⅢ層上面から掘り込まれている。明黄褐色の下層には灰白色シルト層がみられる。

第3節　遺構・遺物

ＳＤ01

調査区の南東で検出した溝で、幅約5ｍ、深さ約1.2ｍである。断面は逆台形を呈し、南西から北東へ向かって底面が下がっていく。埋土は14層に分かれ、堆積状況から少なくとも3回の掘り直しが認められる（第7図参照）。

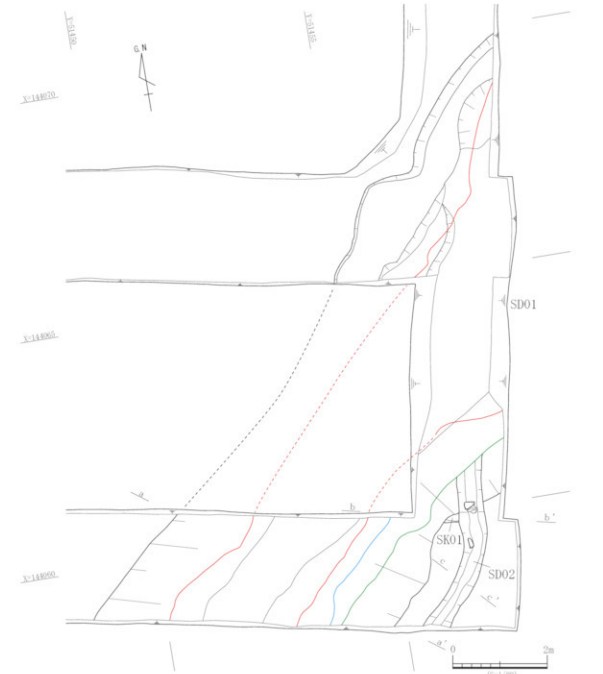
埋土　1層は褐灰色シルト層で最も新しい。遺構検出段階でもこの層が認識できた（第6図平断面図:赤線）ため、再掘削されたものと考えられる。第7図の平面図と断面図の1層の幅が異なるのは、検出段階（平面図を作成した段階）よりも若干掘り下げてしまったため断面図では狭くなった。2層は暗赤褐色シルト層である。日暮・松林遺跡第10次調査SD02の1層が同じ暗赤褐色シルト層で、時期は出土遺物から10世紀以降である。そのためSD01の1,2層は10世紀以降に堆積したと考えられる。1,2層からは時期が判明する遺物は出土していない。3～9層は、黒褐又は黒色の細粒砂～シルト層である。3層は黒褐色シルト層で4層は黒色粘質土層である。層の切り合い関係から、3～9層の中では3層が最も新しく、次に4層が新しい。2～4層は胎土の粒度は同様で色調が漸移的に変化することから掘り直しが行われた可能性は低い。一方、3層と10層の境界は遺構検出段階に東側のみ認識できた（第6図平断面図：青線）ため、掘り直しが行われたと考えられる。5，6，9層は直径3cm程度の黄橙色の小礫を含む。5～9層については堆積状況が複雑で、数度の掘り直しが行われた可能性がある。10層は5cm程度の黄橙色の小礫を多量に含む黒褐色中粒砂層である。地山起源の土砂と考えられる。また、10層と12層の境界も遺構検出段階で東側のみ確認ができた（第6図平断面図:緑線）ため、再掘削されたものと考えられる。この段階にSD02も掘削されている。11，13，14層は褐灰色水性砂質土層で木片を多量に含んでいた。4層と11層の境界付近で木器が検出された（第8図）。

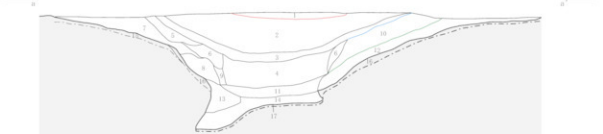
以上の所見をまとめると以下のようになる。SD01が掘削された（上端黒線）後に12層が堆積した。その後再掘削されるとともに（上端緑線）、SD02が掘削される。その後10層が堆積すると、再掘削され（上端青線）、黒褐色シルト層が堆積する。最後に10世紀以降に再掘削され（上端赤線）、1層が堆積する。現段階で認識できる順序は以上のとおりであるが、11，13，14層にあたる部分がどの段階で掘り込まれたのか、最初にSD02が掘削された時期は現段階では不明である。出土遺物からは、最下層である褐灰色砂質土層（11,14層）が堆積したのは弥生時代後期後半以降であることがわかる。

出土遺物　遺物の取り上げは、灰褐色シルト層（1層）を第Ⅰ層、黒褐色シルト層（2,3,5～7層）を第Ⅱ層、黒褐色シルト（粘質土）層（4層）を第Ⅲ層、褐灰色砂質土層（11，14層）を第Ⅳ層とし、各層ごとに取り上げを行った。

灰褐色シルト層（第Ⅰ層）からは時期が判明する遺物が出土しなかった。

1～8は、黒褐色シルト層（第Ⅱ層）出土遺物である。1～3は弥生時代前期後半の甕又は鉢の口縁部である。1は逆L字状口縁で断面は三角形である。内面にわずかに肥厚する。口縁端部には刻目、頸部には5条の沈線が施される。2・3は逆L字状口縁である。内外面ともに磨滅している。4～6は弥生時代後期の甕の口縁部である。4・5はくの字で、4は内面の端部がわずかに肥厚する。6は口縁部から頸部にかけて残存している。頸部が強くナデられ頸部と胴部が明瞭に区分される。7・8は弥生時代後期の高坏である。9は甕の底部である。上げ底で、内外面にナデが施される。

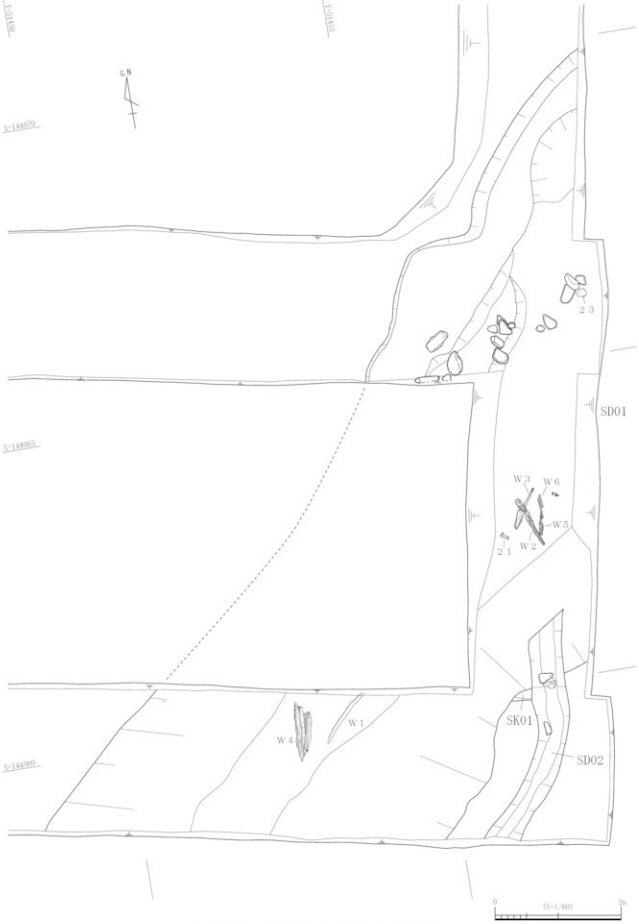




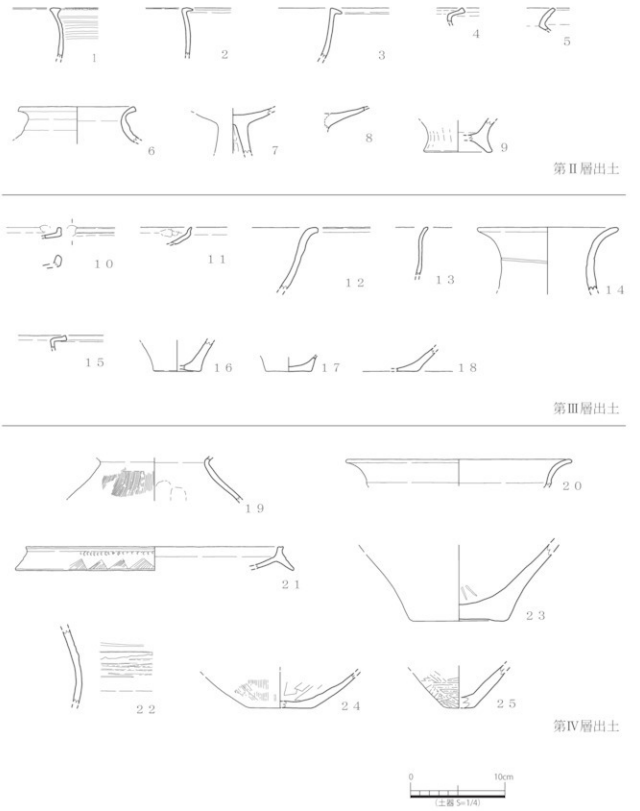
1. 10YR6/1 褐灰シルト
2. 5YR3/2 暗赤褐シルト（黄色ブロック含む）
3. 7.5YR3/1 黒褐シルト（黄色ブロック含む）
4. 10YR2/1 黒シルト（粘性高い）
5. 7.5YR3/2 黒褐細粒砂（小礫含む）
6. 10YR3/2 黒褐シルト（小礫含む）
7. 7.5YR3/1 黒褐シルト
8. 10YR2/1 黒シルト
9. 10YR2/1 黒シルト（3cm 程度の小礫含む）
10. 10YR3/1 黒褐中粒砂（5cm 程度の礫多量に含む）
11. 7.5YR4/1 褐灰中粒砂（5cm 程度の小礫含む）
12. 7.5YR4/1 褐灰シルト（黄色ブロック含む）
13. 10YR2/1 黒シルト（粘性高い、木片含む）
14. 10YR4/1 褐灰中粒砂（5cm 程度の小礫含む）
15. 10YR7/6 明黄褐シルト（粘性高い）
16. 10YR5/1 褐灰シルト（粘性高い）
17. 10YR4/2 灰黄褐中～細粒砂（小礫混じり）

0 1m
(S=1/40)

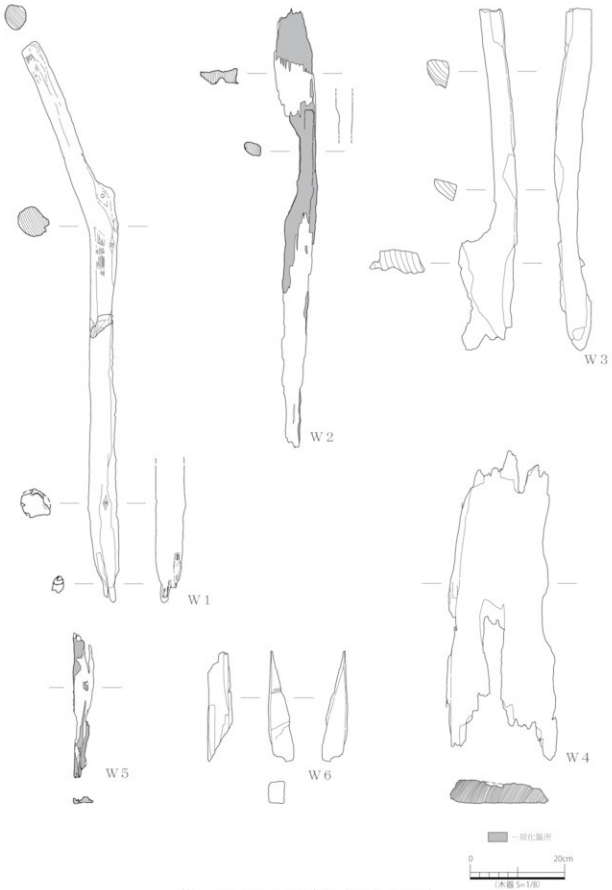
第７図　SD01,02,SK01 平面図・SD01 断面図（S=1/80・40）



第８図　SD01 遺物出土状況図（S=1/60）



第９図　SD01 出土遺物（土器）(S=1/4)



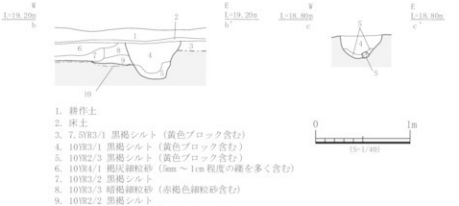
第１０図　SD01 出土遺物（木器）（S=1/8）

１０～１８は、黒褐色シルト（粘質土）層（第Ⅲ層）出土遺物である。１０・１１は縄文時代晩期の浅鉢の口縁部である。１０は端部が上方に拡張され粘土を貼付し装飾される。端部の外面には１条の段がみられる。内面、外面ともに横ナデが施される。１１は端部が外反し、内面にナデと指オサエが施される。１２・１３は弥生時代前期後半の甕又は鉢の口縁部である。如意型口縁で１２は端部がコ字状にナデられている。１４は弥生時代前期後半の壺の口縁部である。頸部に１条の沈線が施されており、外面は磨滅している。１５は弥生時代後期の甕の口縁部である。くの字で、端部の内面がわずかに肥厚する。角閃石を含んでおり、香東川下流域産土器と思われる。１６・１７は甕の底部である。平底である。１８は壺の底部である。平底である。

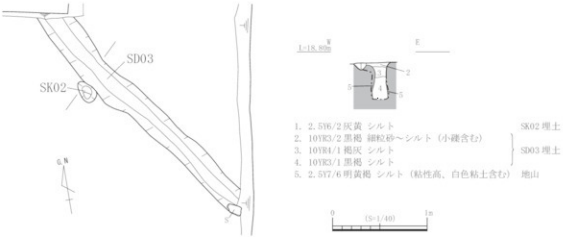
１９～２５は、褐灰色砂質土層（第Ⅳ層）出土遺物である。１９は弥生時代後期の甕の頸部である。縦ハケで整形した後に頸部のみ横ナデが施される。角閃石を含んでおり、香東川下流域産土器である。２０は弥生時代後期の高坏の口縁部である。外反し、端部は丸くナデられている。２１は吉備系の器台である。口縁部の端部に加飾帯を貼付し、外面には上部に半截竹管文、下部には山形文を施す。２２は器種不明の胴部片である。１条の突帯が貼付されており、突帯より上部にナデ、下部にヘラミガキが施される。２３・２４は壺の底部である。２３は弥生時代前期後半の壺の底部で、直径約20 ㎝程度の白色礫とともに溝底面から出土した。２５は甕の底部である。外面にはタタキ痕が残り、内面にはナデが施される。

Ｗ１～Ｗ６は木器である。第Ⅲ層と第Ⅳ層の境界付近から出土した。Ｗ１は杭である。先端には加工痕がみられる。形態から自然木の一部を加工して使用していたことが分かる。Ｗ２～Ｗ６は板状の木製遺物である。いずれも加工痕はみられないため製品の可能性は低いが、炭化している箇所がみられるため破材の可能性がある。

時期　最下層から弥生時代後期後半の遺物が出土していることから、溝の開削時期は弥生時代後期後半以前であると考えられる。埋没時期は不明だが、主に弥生時代後期後半に機能していたと考えられる。



第１１図　SD02・SK01 断面図（S=1/40）



第１２図　SD03・SK02 平・断面図（S=1/80・1/40）

ＳＤ０２・ＳＫ０１

SD02・SK01 は調査区の南東で検出した溝と土坑である。SD02 が SK01 を切っており、SK01 はほとんど残存していないため性格は不明である。SK01 から遺物は出土していない。SD02 は幅約 40 ㎝、深さ約 25 ～ 40 ㎝の溝である。底面の高さは南から北に向かって下がっていく。SD01 へ排水するための溝と考えられる。底面から約 5 ㎝程度黒褐色シルト層が堆積しており、その上層には黒褐色シルト層に黄橙色シルトの土がマーブル状に混じった層がみられる。どちらも地山起源の土と考えることができ、人為的に埋めた可能性が高い。底面には直径約 20 ㎝程度の白色礫が点在している。遺物は出土していないため詳細な時期は不明だが、SD01 に伴うものであることから弥生時代後期後半と考えられる。

ＳＤ０３・ＳＫ０２

SD03・SK02 は調査区の北東で検出した溝と土坑である。SK02 が SD03 を切っている。SK02 は長軸約 25 ㎝、短軸約 15 ㎝、深さ約 7 ㎝の土坑である。埋土は黄灰色シルト層で、遺物は出土していない。SD03 は幅約 27 ㎝、深さ約 40 ㎝の溝で、幅が非常に狭いのが特徴である。底面の高さは南から北に向かって下がっていく。埋土は 3 層に分けられ、下から黒褐色シルト、褐灰色シルト、黒褐色細粒砂～シルト層である。遺物は出土していないため詳細な時期は不明だが、Ⅲ層から掘り込まれているため弥生時代後期後半以前であると考えられる。

第Ⅳ章　自然科学分析

高松市日暮・松林遺跡１１次調査出土木器の樹種同定

（株）吉田生物研究所

１．試料

試料は高松市日暮・松林遺跡から出土した木器６点である。

２．観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

３．結果

樹種同定結果（針葉樹２種、広葉樹２種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

１）マツ科モミ属（Abies sp.）（遺物No.3,5（Ｗ４，Ｗ６））（写真No.3,5）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで晩材部の幅は狭い。柾目では放射組織の上下縁辺部に不規則な形状の放射柔細胞がみられる。放射柔細胞の壁は厚く、数珠状末端壁になっている。放射組織の分野壁孔はスギ型で１分野に１～４個ある。板目では放射組織は単列であった。モミ属はトドマツ、モミ、シラベがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

２）ヒノキ科ヒノキ属（Chamaecyparis sp.）（遺物No.1,2（Ｗ２，Ｗ５））（写真No.1,2）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行が急であった。樹脂細胞は晩材部に偏在している。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で１分野に１～２個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。ヒノキ属はヒノキ、サワラがあり、本州（福島以南）、四国、九州に分布する。

３）ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節（Sect. Prinus Loudon syn. Diversipilosae,Dentatae）（遺物No.7（Ｗ１））（写真No.7）

環孔材である。木口では大道管（～380 μm）が年輪界にそって１～３列並んで孔圏部を形成している。孔圏外では急に大きさを減じ、薄壁で角張っている小道管が単独あるいは２～３個複合して火炎状に配列している。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と対列壁孔を有する。放射組織は全て平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と肉眼でも見られる典型的な複合型の広放射組織が見られる。コナラ節にはコナラ、ミズナラ、カシワ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

４）ニレ科エノキ属（Celtis sp.）（遺物No.6（Ｗ３））（写真No.6）

環孔材である。木口ではおおむね円形で単独の大道管(～230 μm)が数列で孔圏部を形成している。孔圏外では小道管が多数集まって円形、斜線状の集団管孔を形成し、花綵状に配列している。放射組織は1～数列で多数の筋として見られる。柾目では大道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。小道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織は平伏型のものと8～10細胞列の大型のものがある。大型の放射組織は周囲を軸方向に長くやや大型の細胞（鞘細胞）に取り囲まれている。エノキ属はエノキ、エゾエノキ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

◆参考文献◆

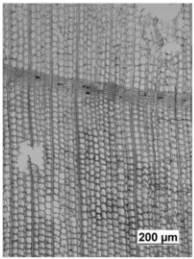
林昭三「日本産木材顕微鏡写真集」京都大学木質科学研究所（1991）
伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京都大学木質科学研究所（1999）
島地謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）
北村四郎・村田源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社（1979）
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」(1985)
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」(1993)

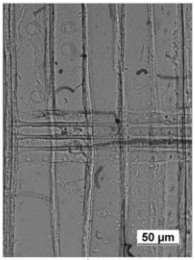
◆使用顕微鏡◆

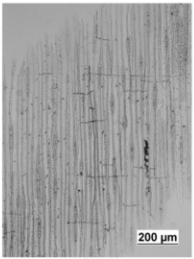
Nikon DS-Fi1

高松市目暮・松林遺跡出土木製品同定表

No.	品名	樹種
1	板状木器（W２）	ヒノキ科ヒノキ属
2	板状木器（W５）	ヒノキ科ヒノキ属
3	板状木器（W６）	マツ科モミ属
5	板状木器（W４）	マツ科モミ属
6	板状木器（W３）	ニレ科エノキ属
7	杭（W１）	ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節

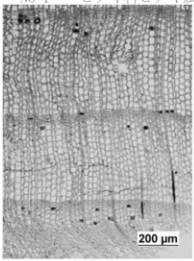


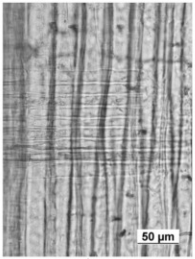




木口　　柾目　　板目

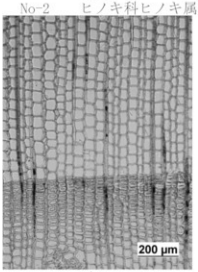
No-1　　ヒノキ科ヒノキ属

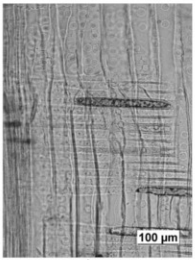


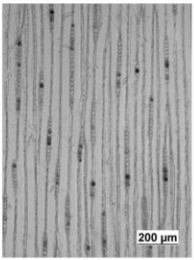


木口　　柾目　　板目

No-2　　ヒノキ科ヒノキ属

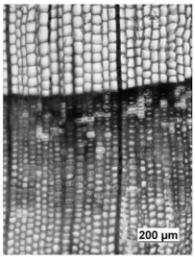


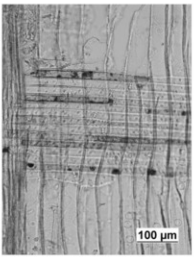


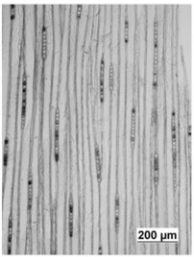


木口　　柾目　　板目

No-3　　マツ科モミ属

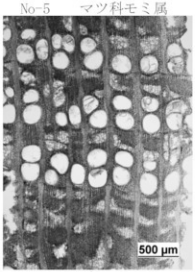


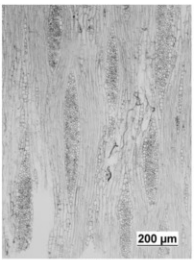




木口　　柾目　　板目

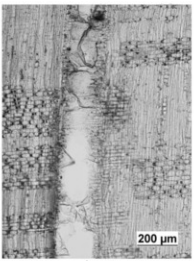
No-5　マツ科モミ属

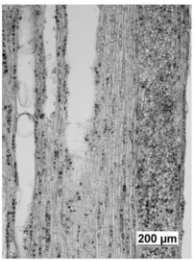




木口　　柾目　　板目

No-6　ニレ科エノキ属





木口　　柾目　　板目

No-7　ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節

第Ⅳ章　まとめ

ＳＤ０１について　本調査で検出された SD01 は、開削時期は不明だが出土遺物から主に弥生時代後期後半に機能していたと考えられる。この溝は、南側の日暮・松林遺跡 10 次調査の SD03 に接続される（高松市教委編 2016）。一方、西側の 1 次調査区（高松市教委編 1997）では、SD01 と同様な断面形態や堆積状況の溝は確認されなかったため、1 次調査区北側で検出された河川（SR01）に接続されるものと考えられる。つまり、SD01 の性格は、旧河道を取水源として北東へと流下する灌漑水路である可能性が高い。同様な性格の溝は、南側の 8 次調査区（高松市教委編 2007）でも確認されており、南の旧河道を取水源として北東へと流下する。これらの事象から、日暮・松林遺跡の北東方向に生産域があったと考えられる。信里氏の検討（信里 2008）によると、弥生時代後期に香川県内の他の遺跡でも比較的規模の大きな灌漑水路網が形成されるようである。本遺跡で検出された SD01 についても、弥生時代後期に多肥松林遺跡群で展開される灌漑水路網の 1 つであると考えられる。

杭について　SD01 から弥生時代後期後半の杭（Ｗ１）が出土した。杭に使用された樹種はコナラ節であった。ここでは香川県出土の縄文時代後・晩期～古墳時代初頭の杭の樹種について述べる。

香川県出土の縄文時代後・晩期～古墳時代初頭の樹種同定された杭は 65 点である。その内コナラ属又はコナラ節は 8 点（12.3%）であった。この点数は、クスノキ科・クヌギ節と並び最も多いが、その他の樹種も多数利用されており、選択的にコナラ属又はコナラ節の木材が利用された可能性は低いだろう。では、コナラ属又はコナラ節の木材が縄文時代後・晩期～古墳時代初頭にどのように利用されていたのかに着目すると、コナラ属又はコナラ節を利用した木製品は 42 点出土しており、中ノ池遺跡で鍬の未製品が 1 点出土している以外は柱材・杭（井堰構築材も含む）・加工材であった。

参考文献

中山尚子・片桐孝浩 2007「木製品製作時における樹種の選択」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅲ』香川県埋蔵文化財センター

西岡達哉 2006「出土木製品の用材について」『十瓶山Ⅱ』田村久雄傘寿記念会

信里芳紀 2008「大溝の検討」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅳ』香川県埋蔵文化財センター

高松市教育委員会編 1997『日暮・松林遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第 34 集

高松市教育委員会編 2007『日暮・松林遺跡（共同住宅）』高松市埋蔵文化財調査報告第 105 集

高松市教育委員会編 2016『日暮・松林遺跡 －第 10 次調査－』高松市埋蔵文化財調査報告第 173 集

※香川県出土木製品データを山下平重氏より提供して頂いた。ここに記して厚く謝意を表したい。

第１３図　周辺調査区位置図（S=1/1,000）

第1表　土器観察表

番号	調査区	遺構名/層位	種類	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土		焼成	残存率	備考
1	5a1r	S001 黒褐色シルト（第Ⅱ層）	弥生土器	壺	口縁			[5.3]	刷目・ナデ・沈線3条	ナデ	7.5YR7/4に ぶい橙	7.5YR7/4に ぶい橙	普	3mm以内の石英・長石を含む	良		
2	5a1r	S001 黒褐色シルト（第Ⅱ層）	弥生土器	壺	口縁			[5.0]	マメツ	マメツ	10YR7/3に ぶい黄橙	10YR7/6明黄橙	粗	4mm以内の石英・長石を含む	良		黒斑
3	5a1r	S001 黒褐色シルト（第Ⅱ層）	弥生土器	壺	口縁			[5.3]	マメツ	マメツ	2.5Y7/3浅黄	2.5Y7/4浅黄	粗	5mm以内の石英・長石・赤色粒・黒色粒を含む	良		外面、体部に黒斑あり
4	6a1r	S001 黒褐色シルト（第Ⅱ層）	弥生土器	壺	口縁			[1.5]	ヨコナデ	ヨコナデ	7.5YR6/6浅黄橙	7.5YR5/3に ぶい褐	普	0.1～1mm以内の石英・長石・赤色粒を含む	良		
5	2t1r	S001 黒褐色シルト（第Ⅱ層）	弥生土器	壺	口縁			[2.5]	マメツ	マメツ	2.5YR4/8赤褐	2.5Y4/3オリーブ褐	普	0.5～5mmの石英・長石を多く含む	良		
6	6a1r	S001 黒褐色シルト（第Ⅱ層）	弥生土器	壺	口縁	(12.0)		[3.7]	ナデ	ナデ	2.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	普	1mm以内の石英・長石・赤色粒を含む	良		
7	6a1r	S001 黒褐色シルト（第Ⅱ層）	弥生土器	高杯				[4.8]	マメツ	マメツ、絞り目	7.5YR7/3に ぶい橙	5YR6/6橙	普	1～5mmの石英・長石、1mm以内の赤色粒を含む	良		
8	2t1r	S001 黒褐色シルト（第Ⅱ層）	弥生土器	高杯				[2.3]	マメツ	マメツ	2.5YR4/6赤褐	2.5Y6/1黄灰	普	4mm以内の石英・長石、1mm以内の赤色粒を含む	良		
9	2t1r	S001 黒褐色シルト（第Ⅱ層）	弥生土器	壺	底部		(6.8)	[3.3]	タテ方向のナデのち ヨコナデ・ナデ	ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR6/3にぶい黄橙	普	2mm以内の石英・長石・金雲母を含む	良		
10	6a1r	S001 黒褐色粘土（第Ⅲ層）	縄文土器	浅鉢	口縁			[1.4]	ヨコナデ・沈線3条・ナデ・貼付文	ヨコナデ・絞付文	5YR6/4にぶい橙	5YR5/1褐灰	普	1mm以内の石英・長石を含む	良		
11	6a1r	S001 黒褐色粘土（第Ⅲ層）	縄文土器	浅鉢	口縁			[2.2]	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・指おさえ・ナデ	2.5YR4/4にぶい赤褐	2.5YR5/4にぶい赤褐	普	2mm以内の石英・長石を含む	良		
12	6a1r	S001 黒褐色粘土（第Ⅲ層）	弥生土器	鉢or壺	口縁			[6.5]	ヨコナデ・マメツ	ヨコナデ・マメツ	2.5YR6/6橙	N5/灰	普	1mm以内の石英・長石・黒色粒を含む	良		
13	6a1r	S001 黒褐色粘土（第Ⅲ層）	弥生土器	壺	口縁			[5.0]	マメツ・タタキ痕	マメツ	2.5YR6/6橙	2.5YR6/6橙	普	1mm以内の石英・長石を含む	良		
14	2t1r	S001 黒褐色粘土（第Ⅲ層）	弥生土器	壺	口縁	(15.0)		[6.6]	ナデ・ヘラ描き沈線1条	マメツ	10YR7/3に ぶい黄橙	2.5YR6/8橙	普	0.5～5mmの石英・長石・黒色粒を多く含む(1)表面に露出)	良		内外面口縁部付近に黒斑あり、沈線は左上がり。
15	6a1r	S001 黒褐色粘土（第Ⅲ層）	弥生土器	壺	口縁			[1.4]	ヨコナデ	ヨコナデ	10YR5/2灰黄褐	10YR4/2灰黄褐	精良	1mm以内の石英・長石を含む	良好		角閃石を含む
16	3t1r	S001 黒褐色粘土（第Ⅲ層）	弥生土器	壺	底部		(4.6)	[3.2]	マメツ	マメツ	2.5Y5/2暗灰黄	2.5Y5/2暗灰黄	粗	3mm以内の石英・長石・角閃石を含む	良		
17	6a1r	S001 黒褐色粘土（第Ⅲ層）	弥生土器	壺	底部		(4.7)	[1.5]	ナデ	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	2.5YR6/4にぶい橙	普	2mm以内の石英・長石・赤色粒を含む	良		外面全体に黒斑あり
18	6a1r	S001 黒褐色粘土（第Ⅲ層）	弥生土器	壺	底部			[2.5]	マメツ	ナデ	2.5YR5/1赤灰	10YR7/2にぶい黄橙	精良	0.5mm以内の石英・長石を含む	良		外面全体に黒斑あり
19	3t1r	S001 褐灰色中粒砂（第Ⅳ層）	弥生土器	壺	頂部			[4.5]	ヨコナデ・一部工具痕・タテハケ	ヨコナデ・指ナデ	2.5YR4/6赤褐	2.5YR4/1赤褐	精良	1mm以内の石英・長石・金雲母を含む	良好		角閃石を含む
20	3t1r	S001 褐灰色中粒砂（第Ⅳ層）	弥生土器	高杯	口縁	(23.6)		[2.8]	マメツ	マメツ	2.5YR7/4に ぶい橙	5YR7/4に ぶい橙	普	4mm以内の石英・長石を含む	良		
21	6a1r	S001 褐灰色中粒砂（第Ⅳ層）	弥生土器	器台	口縁	(27.0)		[3.4]	ナデ・ヨコナデ・斜行刷毛文・平行線竹管文	ヨコナデ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/2にぶい黄橙・7.5YR7/4にぶい橙	普	2mm以内の石英・長石・黒色粒・赤色粒を含む	良		
22	3t1r	S001 褐灰色中粒砂（第Ⅳ層）	弥生土器	不明	胴部			[7.8]	ヘラミガキ・ナデ	ヘラ削りのち ナデ	2.5Y7/2灰黄	2.5Y6/2灰黄	普	1～4mmの長石・石英を含む	不良		
23	2t1r	S001 褐灰色中粒砂（第Ⅳ層）	弥生土器	壺	底部		(9.6)	[8.1]	マメツ	ナデ・一部ヘラミガキ	2.5Y5/3黄褐	2.5Y6/3にぶい黄	普	2mm以内の石英・長石・赤色粒・黒色粒を含む	良		外面体部の一部に黒斑
24	6a1r	S001 褐灰色中粒砂（第Ⅳ層）	弥生土器	壺	底部		(7.2)	[3.7]	ハケ	板ナデ	2.5Y6/2灰黄	2.5Y5/1黄灰	普	3mm以内の石英・長石・黒色粒・赤色粒を含む	良		
25	3t1r	S001 褐灰色中粒砂（第Ⅳ層）	弥生土器	壺	底部			[4.5]	ナデ・タタキ	ナデ	2.5YR6/4浅黄橙	2.5YR6/3浅黄橙	普	2mm以内の石英・長石・赤色粒・金雲母の小石を含む	良		

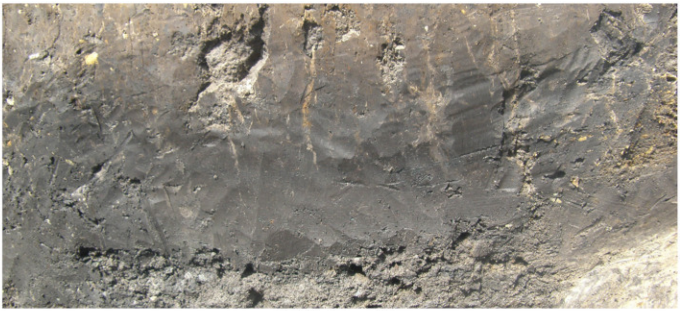
第2表　　木 器 観 察 表

報告書番号	調査区	遺構名/層位	器種	法量(cm)			(部位)
				長さ	幅	厚さ	
W1	3tr	SD01 褐灰色中粒砂（第Ⅳ層）	杭	[118.6]	[6.6]	[6.0]	
W2	6atr	SD01 黒褐色粘土（第Ⅲ層）	板状木器	[93.0]	[9.2]	[3.3]	
W3	6atr	SD01 褐灰色中粒砂（第Ⅳ層）	板状木器	[72.1]	[12.4]	5.6	
W4	3tr	SD01 黒褐色粘土（第Ⅲ層）	板状木器	[65.5]	[23.5]	[5.0]	
W5	6atr	SD01 黒褐色粘土（第Ⅲ層）	板状木器	[30.8]	[4.5]	[1.4]	
W6	6atr	SD01 黒褐色粘土（第Ⅲ層）	板状木器	[23.2]	[5.3]	[4.6]	

写　真　図　版

SD01 断面

SD01 第７図 10・12 層



SD01 第７図４・11 層

SD01（２トレンチ）北壁

SD01（２トレンチ）完掘状況

SD01（２トレンチ）検出状況

SD01（３トレンチ）完掘状況

SD01（２トレンチ）壺底部出土状況

木器（Ｗ１）出土状況

木器（Ｗ２・５・６）出土状況

木器（Ｗ３）出土状況

木器（Ｗ４）出土状況

調査前風景

1トレンチ完掘状況

2トレンチ完掘状況

3トレンチ完掘状況

SD02 完掘状況

SD02 断面

SD03・SK02 完掘状況

SD03 断面

遺物写真（土器）

遺物写真（土器）

遺物写真（木器）

遺物写真（Ｗ１）加工痕

遺物写真（２１）

遺物写真（２３）

報 告 書 抄 録

ふりがな	ひぐらし・まつばやしいせき（だいじゅういちじちょうさ）
書名	日暮・松林遺跡（第１１次調査）
副書名	店舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第 194 集
編著者名	梶原　慎司
編集機関	高松市教育委員会
所在地	〒760－8571　香川県高松市番町一丁目８番 15 号　　TEL087－839－2660
発行年月日	西暦 2018 年３月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	発掘期間	発掘 面積	発掘 原因
ひぐらし・まつばやしいせき 日暮・松林遺跡	かがわけん 香川県 たかまつし 高松市 たひしもまち 多肥下町	37201	10806	34° 17′ 52″	134° 03′ 32″	2017.6.19 ～ 2017.7.7	180 ㎡	店舗建設 工事

所収遺跡名	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物	特記事項
日暮・松林遺跡	集落跡	弥生時代 後期後半	溝 ピット	弥生土器	

要約	弥生時代以前の溝３条を確認した。調査区の中で最も規模の大きい SD01 は、少なくとも３回の掘り直しが認められ、最下層からは弥生時代後期後半の土器が出土した。SD01 の性格は、西側の旧河道を取水源として北西へと流れる灌漑水路と想定される。

店舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

日暮・松林遺跡（第 11 次調査）

平成 30 年３月 31 日

編集　高松市教育委員会
　　高松市番町一丁目８番 15 号
発行　株式会社　大屋
　　高松市教育委員会
印刷　有限会社 中央ファイリング